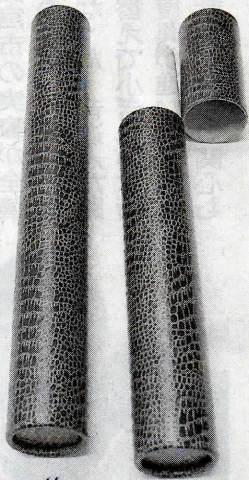


学校モノがたり

卒業証書包むワニ柄の格調



2014.3.13 朝日

卒業証書入れとして広まったのは戦後になってから。信雄さんの次女、チヨさん(79)は「思い出の文具に育ってうれしい。父の発想には先見の明があったのかも」。

だが、少子化の波やホルダー式の広まりで需要は減少傾向。銀鳥産業は、ふたを開くと音楽が流れる新製品も構想中だ。曲はやはり「仰げば尊し」だという。(小暮純治)

誰もが一つは押し入れにしまっている、見覚えのある黒地でワニ柄模様。卒業証書を収めた細長い筒は、名前もそのまま「賞状筒」という。

多くは紙製だが、幼稚園などではプラスチック製も人気だ。丸形だけでなく、賞状の出し入れしやすさを狙った四角形も販売されている。

名古屋市市の文具卸会社「銀鳥産業」では、ピンクや青など色とりどりの16種をそろえているが、「注文の95%はワニ柄」という。「重々しさが人気なのでしょう」と商品部の上江滝(うえたき)修さん(42)。

いつからワニ柄が定番になったのか。老舗メーカー「小林丸筒製作所」(東京都江戸川区)によると、習字用の筆や半紙入れとして販売していた筒に、創業者の小林信雄さんが1935(昭和10)年ごろ、「飽きのこない柄」として採用したのが始まり。子ども向けだけにキリン柄の案もあったらしい。